

## 第6分科会 美術教育2016

全国教研に参加して

礼文町船泊中学校 棒田 志帆

今年度、全国教研に参加したレポート。礼文町の川から取れる粘土を使った陶芸で茶碗をつくるだけでなく、茶道の先生を講師に招きお茶を点てて、日本文化に理解を深める実践報告。初めての全国教研参加ということだったが、礼文の環境を生かした実践が子どもたちにリアリティのある美術文化を伝えていると評価されたことは、大いに励みになったと振り返る。北海道では様々な地域の特性はあるが、それをどのように教育活動に生かしてゆくかは教師の力量に委ねられる部分が多い。棒田先生は身の回りの環境を生かす視点を大切にし、美術教育の中にしっかり位置づけようと奮闘している。全国教研では礼文という地域の自然や文化の特異性をより活用できる視点を得て、更なる実践を積み重ねている。礼文の粘土は不純物が少なく、他の地域では同じようにはいかないという事実は子どもたちの心に確実に根を下ろす地域の持つ価値となったはずだ。僻地教育という言葉で一括りにすることなく、生徒や環境をしっかりと見つめ、美術という教科を通じてできることは何かを常に意識した教育活動は、美術教育を支える重要な基盤であることを改めて提示してくれている。

モデルは「かもめ島のカニさん」～体験・飼育・観察を通して表現する～

江差町立南が丘小学校 山根 里美

8年ぶりに小学1年生の担任を持ったという中で書かれたレポート。海が間近にあるという地域性を生かし、炊事遠足の際に行った磯遊びでカニを釣った体験を造形活動に結びつけている。体験と表現を結びつけることを一貫して大切にしてきた山根先生の今回の実践では、釣ったカニを教室で飼育することが大きなポイントとなっている。ペットボトルに海水を汲んで来る毎日の水替えなど、普段の生活では得られない体験は、カニに向けられる子どもたちの眼差しに計り知れない深さを与えることになる。このことは作品制作の前に、カニを見ないで描くという行為を経て、見るということがどのようなことなのかを子どもたちが知識ではなく、身をもって体得できることに結びつく。手にとって観察することができるカニは子どもたちと文字通り生きた教材として対話を促す。カニを取り巻く海水や砂や石などにまで想像を広げ、表現に取り込まれて

ゆく様は、正に体験なくしては成立し得ない創造の賜物である。持ち込まれた数多くの作品から、子どもたちの息吹が聞こえてくるかのようにだった。

ネット上で交わされる情報の渦に翻弄される現代人の生活は、皮肉にも情報に対する依存度を増している。この流れを遮ることは難しいかもことかもしれないが、身をもって体験したことに裏付けられた情報は生きたものとして人の生き方に根付いてゆく。小学校低学年という発達段階における自然体験は、成長し現代社会の生活者となる彼らにとって確実に必要とされるものである。学校教育での美術の役割はその仲立ちを果たすハブとして機能する活動となることを確信する実践である。

絵「絵の具でゆめもよう」・造形あそび「つなぐんぐん」～感性を働かせながら、試して・関わって・つくり出す喜びを養う授業をめざして～

稚内東小学校 遠藤 依里

小学校4年生の授業実践レポート。稚内という地域を子どもたちがどのように捉えるかを題材のテーマにドリッピングや吹き流しなどの技法を用いてつくられたものをコラージュすることで作品へ発展させている。自らの考えに乗っ取り、意図的に創造する行為は他者との違いに気付く場でもり、この授業では子どもたちは周囲の取り組みの様子から、その良さや面白さを相互に学ぶ姿勢を育む。これまでの教育の在り方のひとつは、正解により早く辿り着くことに偏重していたと言えるが、旧来、美術教育は正解を追い求めるのではなく、数多の中から自らが価値を与える適正な解を導くものであった。時代や社会の変化の中で学力の在り方が問われる今、学校教育の中で美術は確実にその成果を果たしていると感じさせる実践である。

また新聞紙を細く巻いた棒を用いて立体作品をグループでつくる実践では、他者との協働をより積極的に行うことを求めている。人間同士の関わり方が希薄になっているのは子どもたちの世界でも同じであろうが、積極的にコミュニケーションを促し、相互協力の中から価値あるものをつくり出すことができる能力は、これからの世の中でますます必要とされる資質であり、教育活動に積極的に取り入れられるものである。教育現場で起こりうる数々の事例を手がかりに、遠藤先生の実践では、子どもたちに確実につけさせたい力がどのようなのかを探求している。

「自信作が生まれた!!」

上ノ国町立滝沢小学校 森 博則

森先生はベテラン中のベテラン。教職として残り少ない時間を複式学級で行われた実践レポート。不器用であったり、机についていられない子どもたちと粘り強く、悪戦苦闘の日々にあっても諦めずに子どもたちに寄り添い、時には他の子どもたちの力を借りながら取り組む教育は確実に彼らの成長を促していることに気付く。子どもたちと関わる中で、悩みながらも諦めずに前進しようとする姿はベテランであろうと新卒であろうと同じである。しかし、このことに私たち教師の仕事が子どもと教育活動を通じ、相互に成長し合える価値のあるものだと勇気づけられる。

指導の在り方を模索する中で、生徒の興味関心から学習へアプローチできるよう工夫を重ねた木版画の実践では、教師が心から「素晴らしい」と絶賛できる作品が生まれる。「自信作が生まれる!!」とは、教師の働きかけと生徒の学習に向かう意欲が高まって成立するものなのだと改めて知らされた事例である。子どもたちの学力を高めるための機会は美術のような無心に取り組む場面でこそ現れるのではないか。中学校、高校と教科の担当教師が分業化し、専門性に触れる割合は高まるが、小学校のようにあらゆる教科を通じ生徒の能力や適性を伸ばす総合的な視点は希薄になってゆく。森先生の実践からは、多面的なアプローチによって生徒の総合的な学力を高められる可能性と教科相互の密接な関連による生徒理解の重要性が示唆されたと感じた。

釧路養護学校 永井 慶典

「美術で何を学ぶの？」

養護学校での実践報告。年間指導計画の作成は美術の授業であっても必ずしも美術の専科で立てる訳ではなく、多くの教科の専科教師が関わって作成される。様々な実態を持つ生徒が在籍するため、限られた時間での制作やマンツーマンでの指導など、それぞれの対応が一様にはできないジレンマが養護学校にある。四季ごとの単元分けによる指導の難しさや取り組む課題によっては、時期にズレが生じ、子どもたちにとって実感を損なってしまうことになるなど現場が抱える課題も少なくない。ただ永井先生は少しずつでも現場で声を上げながら現状を少しでも前進させようと奮闘されており、灯籠の制作では、光を灯すことで子どもたちに感動や制作の喜びを味わわすことができたと振り返る。

同一の教材であっても、実態の違いによって目標も異なる中で「美術で何を学べばよいのでしょうか？」という永井先生からの問いは、美術教育に関わる者全てに共通する大きな命題だ。情操教育として、つくることができたら、楽しい、嬉しいと感じることができる体験を大切にできるように教師側の準備の重要さは言うまでもないが、作品制作に興味を持たない子どもたちとどう関わるか、鑑賞分野まで踏み込むことができないなど解決すべき事柄はあるが、できかけていることをできるようにすることや、自分一人でできるようにするという目標に向けた取り組みを美術の力が後押しできる兆しを感じる実践であった。

「Next dimension」～まだ変わらないけど、変わったよ？～

名寄市立智恵文中学校 茶谷 裕樹

今年度、異動した学校での実践発表であった。茶谷先生は、これまで美術は専門外であったが、この度、ご本人の努力と熱意で遂に美術免許が認定された。しかし、免許外とは言え、茶谷実践は専科が足下にも及ばないほどの説得力とパワーが備わっており、専科として今回は更に拍車が掛かった。特に鑑賞教育では、自身が実際に足を運んで見聞したことを基盤にした実践により、子どもたちも美術館などへ向かい、そこで優良な鑑賞者として育てられたことは特筆に値する。加えて、茶谷先生は理科と技術をこれまで指導して来られたが、少人数校

だからこそ複数の教科を横断した取り組みによって多大なる教育効果を生んだと考えられる。美術だけを専科とした教師には到底叶わない実践力である。異動先では、教材の精選を進め、教材や学習内容の関連性を重視しつつ、3年間を見通した授業計画を立てるなど、生徒の実態と授業の実際をしっかりと見つけた教育活動により、確実な教育効果が得られるものと実感させられる。また特別支援を要する生徒への指導でも、生徒自身が感じた感覚を表現できるよう、いくつかのことばを選ぶことができるフリップを用いた指導を行ったり、静物画の背景が決められないことへの対策として様々な色画用紙を用意して実際のモチーフの後ろに置いてみることでイメージの具体化を図るなど、実践の工夫にも余念がない。

中学校では、美術の専科が不在な場合も少なくなく、教科の理解が薄いまま教育活動が行われている場合がある。主要科目という言葉で学力が狭義に捉えられてしまいがちなこれまでとは違い、これからの教育では想像する活動や創造

力を高める取り組みが重要となる中、美術教育の在り方も現場レベルで精査する必要がある。

茶谷先生は美術を「他の教科ではつけることのできない力や、他教科ではあり得ないほど広範な力をつけることができる教科である」として大切にしているとレポートで触れている。更に「どの指導場面で、どのような力を、どう伸ばさせるか」明確なビジョンをもって進められるよう努力したいと綴っている。日々の忙しさに紛れ、つい見失ってしまいそうになる授業を通じて生徒に向ける眼差しを私たちは忘れないよう、この言葉を常に忘れずにいたい。

江・上・有～美術教育感今日におもうこと～

江差高校 十河 幸喜

在職する江差高校の他に学校間連携で上ノ国高校でも授業を受け持ち、更に通信制の有朋高校の地方指導員として多忙な日々の中での実践レポート。「教育は強制だ」ということばをしばしば使うことがあるが、決して高圧的な指導を意味するのではなく、今と将来を保障するための取り組みを称してのことばである。その指導は、作品制作を通じた一筋縄ではいかない体験を生徒にさせることに重きが置かれており、そこから学ぶことの大きさが実感として理解されていることが大きい。それ故、複数の学校に関わった生徒との信頼関係は強固であり、指導の成果にも現れている。教師のお節介と表現しているが、例えばデザインの指導では用意周到な準備と基礎基本を重視した授業により地域や学校毎の生徒の実態をも軽々と飛び越えた成果ある造形活動を可能にしている。アクティブラーニングなど昨今の流行に流されずに貫かれる姿勢は「生徒から学ぶ」という十河先生の教育に対する熱い思いがあるからこそであろう。

「考える授業」の取り組み

釧路江南高校 上野 秀実

単位制高校での授業実践レポート。進学を重視する学校体制を組んでおり日々の学習指導にも重点が置かれているが、肝心の生徒たちに想像力や創造性が希薄との危惧を感じている。受験のための学力を身に付けることも大切であるが、一方で物事へ向ける視点を増やし、取り組みの可能性を広げられることは大学等への進学を果たした後も常につきまとう生きるための力であるとして、美術が持つ造形活動を通じて考えることを深められるような経験ができるような授

業を構成している。特にデザイン分野を積極的に教材に取り入れることで、社会と人間の関わりに目を向けさせ、潜在する課題を生徒自身がデザイン作品で解決の提案を行う授業は、現代社会における課題解決の手法と同じ流れである。ペットボトルを題材にし、生徒各自がそこに存在する課題を発見し、デザインの手法を用いて解決の提案をする過程で「質問づくり」の手法を用いて協働による気づきや思考の深化を体験させている。個と集団を往復しながらの授業展開はアクティブラーニング指向とも受け取れるが、流行の先取りをめざしたものではなく、授業の目的を達成するための必然の手法であると位置づけている。基礎基本を重視し、安易に時代に迎合しない十河実践とは対局にあるように見えるが、子どもたちの考える力を高める取り組みとして造形教育を用いていることは、視点こそ異なるが美術が持つ教育力であり、将来の見通しが効かない不透明な時代だからこそ子どもたちに身に付けさせたい普遍的な生きる力であるとの確信からの実践である。